

流動性の罠の下におけるインフレーション・ターゲティング

中央大学経済学部 浅田統一郎

Krugman(1998)は、たとえ経済が流動性の罠に陥っていても中央銀行による「インフレーション・ターゲティング」(インフレーション・ターゲット政策)が有効になり得る理論モデルを提出した。Krugman(1988)のモデルは、流動性の罠の下におけるインフレーション・ターゲティングに関する数少ない数学的モデルの代表例として貴重であるが、ミクロ経済学的に基礎づけられた「代表的経済主体」の最適化行動に基づく事実上の2期間モデルである。彼のモデルにおいては、代表的経済主体は、第2期(次期)の物価水準に関する期待を所与として、第1期(今期)における効用の割引現在価値を最大にするように行動する。その際に、中央銀行の行動の信憑性ないしは信頼性が、金融政策の有効性に対して大きな役割を果たす。

本稿においては、インフレーション・ターゲティングがマクロ経済のパフォーマンスに及ぼす影響を、Krugman(1998)とは異なったモデリングの方法によって分析する。我々が依拠するモデルは、Asada, Chiarella, Flaschel, and Franke(2003)等によって開発された、「負債効果」(debt effect)を含む「高次元動学的ケインジアン・モデル」(High-dimensional dynamic Keynesian model)である。「高次元動学モデル」とは、多数の内生変数を含む連立微分方程式ないしは連立差分方程式を用いた動学モデルである。通常、このアプローチは、経済主体の最適化行動を明示的には扱わないが、その定式化が経済主体の最適化行動と必ずしも矛盾するわけではない。我々のアプローチのメリットは、経済の中に埋め込まれた若干の重要な安定化メカニズム(ネガティブ・フィードバック・メカニズム)と不安定化メカニズム(ポジティブ・フィードバック・メカニズム)を明示的に識別して分析できることである。本稿のモデルにおいても、Krugman(1998)のモデルと同様に、中央銀行の態度や行動の信憑性ないし信頼性という微妙な概念が、マクロ経済のパフォーマンスに対して大きな影響を及ぼす。なお、本稿は、Asada(2006)に基づいている。

参考文献

- [1] Asada, T. (2006) : "Inflation Targeting Policy in a Dynamic Keynesian Model with Debt Accumulation : A Japanese Perspective." In C. Chiarella, P. Flaschel, R. Franke, and W. Semmler (eds.) *Quantitative and Empirical Analysis of Nonlinear Dynamic Macromodels* (Elsevier, Amsterdam), pp. 517 – 544.
- [2] Asada, T., C. Chiarella, P. Flaschel, and R. Franke (2003) : *Open Economy Macrodynamics : An Integrated Disequilibrium Approach*. Springer-Verlag, Berlin.
- [3] Krugman, P. (1998) : "It's Baaack : Japan's Slump and the Return of the Liquidity Trap." *Brookings Papers on Economic Activity* 2, pp. 137 – 205.